

令和7年度
教育研究所事業報告



四万十町教育研究所

令和7年度

四万十町教育研究所 事業報告

目次

1. 教育研究活動（研究員の調査研究テーマ）	
デジタル学習基盤を活用した「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業づくり ～個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実～p 1
2. 学校への研究支援	
(1) Q-U・hyper-QU の取り組みp 5
(2) 「いのちの学習」への支援p 6
(3) 校内研修支援p 7
3. 教育支援センターの運営p 8
4. 教育相談活動	
(1) スクールソーシャルワーカーp 11
(2) 発達教育支援員（言語聴覚士）p 13
5. 研究協力校の取り組みp 15
6. 副読本『わたしたちのまち 四万十町』の改訂p 19
7. 四万十教科書センターの運営p 20
8. その他の取り組み	
(1) 研修会p 21
(2) 所内会・全体会p 22
(3) 教育研究所便り「しまんと」p 23
(4) えんぴつの持ち方教室p 24

1. 教育研究活動（研究員の調査研究テーマ）

デジタル学習基盤を活用した「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業づくり
～個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実～

研究員 西澤 尚輝

【テーマ設定の理由】

本町においてもGIGAスクール構想を受け、学校教育の情報化に関する施策を一体的に推進する必要があり、令和5年4月に四万十町ICT教育推進計画（令和5年度から令和7年度）を策定し、環境整備と活用率向上を図ってきた。

急速に変化する社会状況の中で、子どもたちは、課題解決型学習等により、自ら課題を見出し、主体的に考え、多様な立場の者が協働的に議論し、納得解を生み出すことなど、学習指導要領で育成を目指す資質・能力が一層強く求められている。

このことから、もはやスタンダードである1人1台端末などのICT機器の有効活用を図り、多様な子供たちを誰一人取り残すことのない公正に個別最適化された学びや創造性を育む学びを積極的に推進する必要がある。

このため、現計画に基づいた実践と検証や評価を進め、令和7年度を始期とする次期計画を策定することとし、学校教育の情報化推進へ寄与するものである。

【調査研究の概要】

本研究は、デジタル学習基盤を活用した「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業づくり～個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実～を中心テーマに据え、以下の3つの柱を立てて研究を進めてきた。

- ①「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業づくりにおける、効果的なICT活用の探究
- ②四万十町版プログラミング授業の研究
- ③町内全教員によるデジタル学習機器活用のための業務支援と、ICT機器活用率の向上に向けた取り組み

これらの柱は、全て中心テーマに直結するものであり、相互に関連している。「学び→仮説→実践→検証」のサイクルを回し、デジタル学習基盤を活用した「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業づくりに向けて研究を推進することで、四万十町においてこういった授業づくりの考え方や実践の方法を広げていくことを狙いとしている。これらの研究を遂行するためには、先進的な取り組みを視察すること、書籍等から知識を得ること、具体的な授業実践を見て自らも実践を行うことが不可欠である。そのため、各地の研修会や公開授業には可能な限り参加し、その学びを研究に生かしてきた。

①については、まず県内教育DXに関する研修、オンラインでの研修、宮城教育大学附属小学校（「情報科」に関する文科省研究開発指定学校）への視察、先行研究の調査、教育DXに関する書籍の精読等を行い、研究テーマに関する知識基盤を構築した。途中、宮城教育大学の飯島典子教授から研究に関する助言をいただき、研究の軌道修正を図ることで、よりテーマの本質に迫る研究を行うことができた。具体的な成果としては、各小学校において学習者主体の授業（複線型授業）の

実践を行ったことである。その実践を町内の先生方に参観していただき授業の在り方について議論し、よりよい学習者主体の授業のあり方を模索した。これらを通して、本町ならではのデジタル学習基盤を活用した「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業づくりについて、一定の授業モデルを構築することができた。また、窪川小学校においては、3年生と6年生で単元を通して複線型の授業実践を行った。担任教諭と単元計画から授業づくりを行い、時には担任教諭と授業者を入れ替えながら実践を行ったことで、研究員だけではなく、町内の先生方と共に授業を構築することができたことも一定の成果である。ただ、今年度の実践研究を総括したときに見えてきたものは、「1. 学習者主体の授業は丁寧な子どもの見取りと確かな学級経営という基盤の上にしか成り立ち得ない。」「2. 授業準備には一斉指導よりも多大な労力と深い教材研究が必要である」「3. 個別最適な学びの実現には極めて深い児童生徒理解と細やかな手だてが必要である」ということである。

②については、宮城教育大学の飯島典子教授と共同で研究開発を行ってきた。同氏からは、プログラミング学習教材「toio」を貸与していただいただけでなく、研究全体の方向性についても適宜助言をいただいている。添付資料でも示している通り、共同開発した教材を用いて町内の複数の小学校において授業実践を行うことができたことが成果である。特に、「プログラミング的思考を言語化する」という試みはこれまでにない新たな取り組みであり、これによって情報活用能力の向上の一助になることが示唆された。今後、さらに町内での実践を進めていき、四万十町版学習カリキュラムモデルを開発したい。さらに、このモデルを用いた飯島教授との共同研究によって実証的なデータと根拠を持って教育的な価値を明らかにしたい。

③については、各校でのICTに関する校内研修での説明、小学校1年生向けタブレット開き授業の企画立案、令和8年度四万十町教育DX推進計画の策定、四万十町ICT活用ルームの新設、四万十町版情報活用能力ステップシートの作成、情報活用能力育成のための計画作成、ICT活用による不安を抱える教員への授業支援等を行った。これらの研究については、町の教育委員会事務局との共同によって行ってきた。単年度の単発的な取り組みではなく、長期的に効果のある取り組みとなるよう、学校現場へのヒアリングや担当者との打ち合わせを密に行い、研究を進めた。学校現場からは概ね良好な反応を得ることができているため、今後もこの方向性で研究を継続していきたい。

課題としては、実証的なデータの不足である。先生方へのヒアリングや児童の振り返りからは反応を得ることができたが、やはり実証的な教育研究を行うためには、量的・質的なデータが必要不可欠である。今後、研究を進めるにあたっては、どのような方法でデータを取り分析していくのかを年度当初に明らかにして研究を進めていく。また、今年は複線型授業の実践を行い、先生方から様々な意見をいただくことができた。そこから見えてきた課題や反省点（添付資料に詳細を記述している）をもとに、町内に普及させていくための研究を継続したい。そして、今年度は中学校での研究実践を行うことができなかったため、来年度は中学校での研究も行っていく。

<ICTに係る研修及び学校訪問>

5/13	四万十町役場	ICT推進委員会
6/9	川口小	ICT授業実践
6/10	伊野小	令和の授業DX研修会

6/11~24	川口小	ICT 授業実践
6/25	川口小	校内研参加 (ICT 研修)
6/27	川口小	ICT 授業実践
7/1	川口小	ICT 授業実践
7/1	初月小	令和の授業 DX
7/3	窪川小	窪川小 ICT 授業支援
7/4	川口小	ICT 授業実践
7/8	川口小	ICT 授業実践
7/9	仁井田小	ICT 授業支援
7/9	川口小	ICT 授業実践
7/10	窪川小	ミライシード活用支援
7/11	仁井田小	コグトレオンライン活用支援
7/15	仁井田小	プログラミング授業実践
7/16	窪川小	プログラミング授業実践
7/17	仁井田小	プログラミング授業実践
7/22	仁井田小	コグトレオンライン活用支援
7/24	オンライン	Google 活用研修
7/31	窪川小	ICT 活用校内研修実施
8/18	オンライン (文科省)	GIGAStuDX オンライン学習
8/21	改善センター	Google 活用研修
8/22	四万十町役場	教育 DX 推進研修会
8/23	教育センター	ICT を活用した学びフォーラム
8/26	七里小	教育 DX 研修会
9/3	仁井田小	コグトレオンライン活用支援
9/10	七里小	ICT 校内研修
9/12	窪川小	プログラミング授業実践
9/24	七里小	ICT 校内研修
9/25	川口小	ICT 授業実践
9/26	八束小	複式授業セミナー
9/29	須崎小	授業公開参加
10/1	仁井田小	ICT 授業支援
10/2	野市小	令和の授業 DX
10/7	伊野小	令和の授業 DX
10/8	仁井田小	研究授業参加
10/17	川口小	研究授業参加
10/22	七里小	校内研修

10/29	十和小	公開授業参加
10/31	窪川小	ICT 活用支援
11/7	窪川小	デジタル学習基盤を生かした複線型授業実践
11/17	窪川小	デジタル学習基盤を生かした複線型授業実践
11/18	大正中	命の学習
11/20	窪川小	デジタル学習基盤を生かした複線型授業実践
11/25	梶原小中一貫校	研究発表会
11/26	七里小	校内研修参加
11/27~1 1/29	宮城教育大学付 属小学校等	教育 DX 先進校視察(宮城教育大学附属小学校公開授業研究会) 宮城教育大学附属幼稚園視察、宮城教育大学にて研究の打合せ
12/4	川口小	プログラミング授業実践
12/5	窪川小	プログラミング授業実践
12/11	七里小	プログラミング授業実践
12/17	窪川小	プログラミング授業実践
1/9	オンライン	令和の学校教育を考える推進会議
1/15	窪川小	パソコンクラブ授業
1/16	米奥小	プログラミング授業実践
1/20	窪川小	デジタル学習基盤を生かした複線型授業実践
1/22	窪川小	デジタル学習基盤を生かした複線型授業実践
1/23	窪川小	デジタル学習基盤を生かした複線型授業実践
1/26~27	広島	教育 DX 先進校視察(広島市立牛田新町小中学校)
1/28	四国中央市	文部科学省リーディング DX スクール事業 四国中央市オープンスクール事業視察
1/30	窪川小	デジタル学習基盤を生かした複線型授業実践
2/3	窪川小	デジタル学習基盤を生かした複線型授業実践
2/4	窪川小	デジタル学習基盤を生かした複線型授業実践
2/5	窪川小	デジタル学習基盤を生かした複線型授業実践
2/6	窪川小	デジタル学習基盤を生かした複線型授業実践
2/9	窪川小	デジタル学習基盤を生かした複線型授業実践
2/10	東山小	令和の授業 DX
2/13	窪川小	デジタル学習基盤を生かした複線型授業実践
2/16	東又小	プログラミング授業実践
2/17	窪川小	デジタル学習基盤を生かした複線型授業実践
2/19	窪川小	デジタル学習基盤を生かした複線型授業実践
2/25	窪川小	デジタル学習基盤を生かした複線型授業実践
2/26	窪川小	デジタル学習基盤を生かした複線型授業実践

2. 学校への研究支援

(1) Q-U・hyper-QUの取り組み

【実施計画】

期 日	内 容	備 考
4月	校長・教頭合同会で実施のお願い	
4月	各学校の注文書の回収	全小中学校
5月・6月	全小中学校で2回目実施コンピュータ診断	全小中学校
8月	1回目の結果集計	
10月・11月	全小中学校で2回目実施コンピュータ診断	全小中学校
1月	2回目の結果集計	
2月	まとめ	

【目的・概要】

Q-Uは、「やる気のあるクラスをつくるためのアンケート」と「いごちのよいクラスにするためのアンケート」からなり、児童生徒の心を理解するための調査方法の一つである。また、「日常の行動をふり返るアンケート」のhyper-QUを中学校に導入している。教師が児童生徒の個々の状態と学級の状態を理解するための客観的で多面的な資料となりうるものであり、また、学級集団づくりや児童生徒理解、教育実践の効果測定、不登校予防、いじめの発見・予防、学級崩壊の予防において活用され効果が期待できるものである。

本町が、Q-Uに取り組み始めて20年目を迎え、今年度も全小学校・中学校で実施することができた。

【成果と課題】

Q-U・hyper-QUの活用については、実施データを細かく分析し、全職員の資料として校内研修などでの活用や児童生徒の個人面談の資料とするなど、各学校での取り組みが継続されており、児童生徒理解につながっている。

教育研究所でも、実施データは簡易プロット表を作成し、町内の児童生徒の傾向を把握している。その結果については、学校教育課に報告し、情報の共有を行っている。また、学校の先生方にも四万十町全体としての結果を知っていただきたいと思い、研究所便りの中で報告した。

【今後の取り組みについて】

本年度、Q-U・hyper-QUに代わるクラスづくりのための質問紙調査として、東京書籍の「i-check」に変更することも検討したが、質問項目が多く、低学年には負担が大きいと考えられたため、来年度も引き続きQ-U・hyper-QUを実施する予定である。今後もQ-U・hyper-QUのより効果的な活用や、学級経営のマネジメントに反映させていけるように情報発信を行っていきたい。

(2) 「いのちの学習」への支援

【実施内容】

○ 「いのちの学習」実施校

- ◆川口保育所
- ◆認定子ども園たのの
- ◆田野々小学校
- ◆窪川小学校
- ◆影野小学校
- ◆大正中学校

【目的・概要】

研究所では、「いのちの学習」に取り組む学校や保育所に、教材の貸し出しや授業への協力などの支援を行っている。

「いのちの学習」の目標は、

- ① いのちの大切さについて学ぶ。
- ② 友達の気持ちを考えることのできる共感性を育てる。
- ③ このプログラムを通して家族の絆を大切にすることを養う。

である。幼児期・児童期の早い時期にいのちの教育をすることで、いのちに関心を持ち、いのちを大切にしていこうと心育を育てていこうとする取り組みである。

妊婦さんに協力してもらい、母親のお腹の中にいる赤ちゃんの心音を聞いたり、エコーの画像を見たり、赤ちゃんに触れ合うなどの体験的な活動と合わせて、家族から話を聞くことや絵本の読み聞かせや紙芝居、胎児人形、赤ちゃん人形等を使った学習も行っている。

【成果と課題】

本年度も昨年度に引き続き、参観日で「いのちの学習」に取り組み、親子で命の大切さについて考える機会をもってもらった学校があった。教材の貸し出しについては、養護教諭等と連絡を取り合い、できるだけ添えるよう支援を行うことができた。また、今年度は十和小に保管されていた妊婦体験セット2つを研究所で保管して町内への貸し出しが容易に行えるようにした。「いのちの学習」を通して改めて自分や周りの人たちの命の大切さについて考える機会となったと思われる。また、今年度途中から保育所へいのちの学習教材の貸し出しをしていることを伝えたことにより、貸し出しの依頼が増えた。

課題としては、「いのちの学習」を実施している学校が毎年一部の学校に限られていることが挙げられる。昨年度同様、実施校を増やすことにはつなげられなかった。今後も各校へと取り組みが広がるように、研究所便りで取組の紹介をするなど情報発信をしていくようにしたい。

【今後の取組案】

新たに「いのちの学習」に取り組みたい学校については、他校の取り組みや授業展開例を紹介したりして、実施につながるようなサポートを行っていききたい。

年度当初の保育所長会にていのちの学習教材貸出について周知をし、保育所での利用も促すようにしていきたい。

(3) 校内研修支援

【実施時期】

影野小学校	6/26	校内研修(中部教育事務所研修サポート訪問・ICTを活用した授業づくり)
窪川小学校	7/31	校内研修(支援員向けICT活用研修実施)
七里小学校	8/26	公開校内研修(河田先生による講演)
仁井田小学校	10/8	校内研修(1・2年研究授業、中部教育事務所研修サポート訪問・クラウドを活用した授業)
川口小学校	10/17	校内研修(5・6年研究授業、中部教育事務所研修サポート訪問・クラウドを活用した授業)
七里小学校	10/22	ICT活用に関する校内研修
十和小	10/29	公開授業参加、事後協議参加

○四万十町小小・小中連携教育推進協議会 5/16 2/12

【目的・概要】

本町の教育委員会では、校内研修を活性化するために校内研究支援事業を行い、学校独自で使える研修費の補助を行っている。そこで、研究所でも、各学校の校内研修に参加し、研修が活性化するように協力・支援を行っている。

基本的には、校内研修を公開している学校を中心に、ともに研究する仲間の一人として校内研修等に参加させていただくことにする。

【成果と課題】

参加した校内研修では、公開授業を参観したり、授業後の研究協議に参加したりした。また講師による講話を聴くことができたことによって、各校の取り組みを知ることができたり、新たな気づきもあったりして、今後の自身の授業実践に活かせる内容を学ぶことができた。

研究員の研究テーマであるデジタル学習基盤の活用にかかわる小学校の校内研に参加できた一方で、中学校の校内研修には参加することはできなかった。

【今後の取り組み案】

今後もできるだけ多くの学校の積極的に校内研修に参加し、各校の取り組み等について、情報発信も行っていく。



十和小 校内研修

3. 教育支援センターの運営

【目的・概要】

- ◆諸事情（心理的・情緒的・身体的等の理由）により不登校状態に陥った児童・生徒に対して、相談及び個別指導、集団生活の指導・支援を行い、学校生活への復帰及び自立を図ることを目的とする。
- ◆義務教育終了後、進路が決定していない者等に対して、相談及び情報の提供、学習支援などを行い、社会への参加及び自立を図ることを目的とする。
- ◆教育支援センターでは以下の指導目標に基づいて、子どもの成長や課題に合わせて個別に支援を行い学校復帰を目指す。

（指導目標）

○心の安定を図る

- ・教育支援センターが通室生にとって安心できる居場所となるように支援する。

○規則正しい生活リズムを身につける

- ・教育支援センターに通室してくることで生活リズムが作られるように支援する。

○他人の気持ちを考え、認め合うことができる

- ・人と関わったり、つながったりする楽しさを感じられるように支援する。

○様々な活動を通して自信を持つことができる

- ・子どもたちそれぞれが自分の得意な分野での活動を通して自信を持つことができるように支援する。

【通室生の推移】A～G（かげつ入室願受領順）H（たのの・とおわ入室願受領順）

	A	B	C	D	E	F	G	H
4月	通室届	通室						
5月	通室	通室届	通室届		通室届	通室届		通室届
6月	通室	通室	通室					
7月	通室	通室	通室					
8月								
9月		通室	学校復帰	通室届				
10月		通室	行事参加	通室				
11月	通室	津室		通室				
12月	通室	通室		通室			通室届	
1月		通室		通室				通室
2月		通室		通室				通室
3月		通室						

【本年度の活動の概要】

「かげつ教室」

通室届が提出されたら、支援センターでの過ごし方や学習への向かい方・取り組み方について保護者（場合により本人も参加）・担任・学年主任・SSW・かげつ指導員で話し合いを持っている。学校とは月に1度の学校報告会や、支援会（随時）などで緊密に連絡を取り情報共有に努めた。

「かげつ教室」は、月～金曜日まで9時から3時半までの開室で通室回数や通室時刻・滞在時間などは児童生徒それぞれである。例として週1回の通室を目指し、達成できたら週2回の通室を目指すなどの積み上げを図っている。中学生は学校が近くなるので給食に行くことも可能。

「たのの・とおわ教室」

1月上旬以降、毎週水曜日、木曜日の10:00から12:00まで隣保館で活動をしている。

通室のきっかけや定期的な通室につなげるために、支援センターでは体験学習も工夫して行ってきた。「かげつ」では、育てた野菜を使っての調理実習や学期末にお疲れ様お好み焼きパーティーを実施した。また5月には社会見学で、高知方面「高知城・帯屋町」へ行った。10月には高知市内で「ボーリング大会」、3月はSCと一緒に「龍河洞・高知竜馬空港」見学を実施した。

【次年度への課題】

「教育支援センター」では、本人・学校・SSW・保護者等と随時に相談しながら児童生徒の状況に応じた支援センターでの過ごし方や、学校復帰・進路等について、全員が情報共有と支援方針の確認のもと支援にあたっている。（基本的に通室届が出た際に児童生徒の保護者・担任・SSW・指導員の会を持っている）さらに、月末には学校担当者（主に担任）との報告会を行っている。また、必要に応じ在籍校の教員に教育支援センターへの訪問を依頼し、面談や学習指導などの機会を設けることで、通室生の状況の共通理解を図っている。

通室している児童生徒は、学年はもちろんのこと生活リズムや学習の理解度、情緒的な不安定さなどの状況が異なっていることから個別対応の必要があり、指導員の勤務状況によっては人数的に十分な対応が難しい場面が多くある。また、常勤の指導員がいないため、引継ぎが難しい面もある。そのため、研究所の職員とも日頃より情報共有をし、児童生徒に関わりを持ってもらい臨機応変に対応できる関係を築くなどの工夫をしている。

課題としては、

- 1) 学校と連携し、個に応じた支援方法を共有
- 2) 支援センターへ通室届けが出されないまま不登校になっている児童生徒の情報共有
- 3) 支援センターへの通室を敬遠するようなイメージが定着しない発信の仕方

が挙げられる。

通室生は生活リズムの乱れから定期的な来室のリズムが整いにくい。家庭との連携を取りつつ、好きなことや、興味のあることから始めて来室のリズムをつくり、タブレットやリモート学習なども活用しながら徐々に学習に向かわせたい。支援センターは学校復帰だけを目的とするのではなく、子どもたちが支援センターの温かい雰囲気になれ、エネルギーをためながら過ごせる居場所にしていきたいものである。

令和7年度 教育相談活動（SSW）等について

（窪川地域）

月	相 談	学校・保育所訪問	家庭訪問	その他	備 考
4月	14	10	1	46	
5月	12	15	0	52	
6月	14	10	2	51	
7月	13	13	0	34	
8月	3	2	0	9	
9月	23	17	2	33	
10月	15	12	0	37	
11月	15	9	1	33	
12月	20	11	0	21	
1月	9	18	1	31	
2月	15	9	0	18	
3月	21	7	0	25	
計	174	133	7	390	

（大正・十和地域）

月	相 談	学校・保育所訪問	家庭訪問	その他	備 考
4月	8	4	2	19	
5月	6	1	2	17	
6月	5	8	10	26	
7月	8	2	3	28	
8月	3	1	13	5	
9月	7	3	5	13	
10月	4	2	2	16	
11月	2	2	10	16	
12月	6	4	6	26	
1月	16	7	5	65	就学支援プロ：フィードバック含
2月	9	11	6	37	
3月	14	5	2	15	
計	88	50	66	283	

※ 相談は、来所・電話相談を含む。

4. 教育相談活動（SSW）

【目的・概要】

児童生徒、保護者、学校、地域などからの相談を受け、学校だけでは対応が困難なケースに対して、環境への働きかけや調整を行い、福祉・医療などと結びつけることによって解決を図る。増加傾向にある不登校の子どもへの支援にあたっては、家庭訪問を実施すると同時に、関係機関と連携して対応にあたる。また、さらに就学前の厳しい環境にある子どもや発達が気になる子どもについても、小学校へ円滑に入学できるように、保育所や認定こども園（以下「保育所等」という。）、関係機関等と連携して、その子どもと保護者への支援を行う。

【活動内容】

- ・問題を抱える児童、生徒が置かれた環境への働きかけ
- ・関係各機関とのネットワークの構築、連携、調整
- ・保護者、教職員等に対する支援や相談、情報提供

【成果と課題】

- 課題を抱えた児童、生徒について、学校や支援機関への情報提供を行い、調整を図ったうえで連携して支援することができた。
- 発達特性のある子どもやその家族への支援については、本人や家族の困り感に対して環境調整をし、各関係機関と相談しながら支援を行うことができた。
- 不登校の児童生徒については、学校との連絡会や支援会を重ね、保護者との信頼関係を構築する中で学校に繋げる支援を行うことができた。
- ひきこもりや本人及び家族に課題のある児童生徒については、学校・健康福祉課・社会福祉協議会、若者サポートステーション等の関係機関とも連携を図り支援を行った。
- 不登校児の保護者の公教育への考え方も多様化しており、学校に行きたくなければ行かなくてもよいという考えの強い家庭の登校支援は難しい面がある。
- 就学前の子どもについては、今年度より始まった就学支援プロジェクトに関わることで、より具体的な相談活動や早期の子ども対応を行い、円滑な小学校との連携を図ることができた。
- 不登校児の保護者の公教育への考え方も多様化しており、学校に行きたくなければいかなくてもよいという考えの強い家庭の登校支援は難しい面がある。
- 保護者自身が安定した精神状態になく、子ども自身への対応ができにくい環境への働きかけが困難。
- 登校できるようになった児童生徒もいるが、完全な学校復帰には至っていないケースが多い。

【今後の取り組み】

- ・不登校児を支援する場合、その課題は多様化・複雑化している。早急な課題解決は難しく長期にわたるケースが多い。学校との連携により、取り組みの方向性を確認しながら、未然の防止策を強固なものにしたい。
- ・家庭に課題のある児童生徒を支援するためには、保護者自身への働きかけが必要である。そのため、こども家庭センターなど他機関との支援の共有、連携を充実させていく。

令和7年度 発達教育支援（ST）活動 等について

	学校数	実人数	参観	面談 挨拶	訓練	支援会	相談	検査	その他
4月	0	0	0	8	0	2	1	0	3
5月	12	27	3	1	53	0	0	0	2
6月	11	33	3	0	57	0	0	0	3
7月	10	25	0		39	2	0	0	11
8月	0	0	1	0	0	0	0	0	6
9月	8	29	0	1	36	1	1	0	7
10月	10 (保1舎)	31 (保1舎)	0	0	59	0	2	0	6
11月	10 (保2舎)	34 (保3舎)	0	0	70	0	2	0	2
12月	12 (保3舎)	30 (保4舎)	0	0	60	1	1	0	3
1月	14 (保5舎)	35 (保5舎)	2	1	55	0	1	1	12
2月	15 (保6舎)	35 (保5舎)	0	1	78	0	0	0	2
3月	17 (保5舎)	33 (保5舎)	0	0	55	2	0	0	0
合計	119	312	9	12	562	8	8	1	57

【目的・概要】

- 発達障害や学習障害などで学習等に馴染めない児童生徒に対して、授業時間の一部取り出しや放課後の加力の時間等を使用し、言語訓練を行う。
- 平仮名、片仮名、ローマ字の習得やコミュニケーションスキルの向上を支援する。
- 授業への取り組みを促進できるように児童生徒のスキル向上を目指す。
- 学校と連携し、特性を持った児童生徒への対応方法を提示することにより特性を持つ児童生徒への理解を促進する。

【活動内容】

学校へ出向き訓練を行う

保護者に対して児童生徒の現状の説明

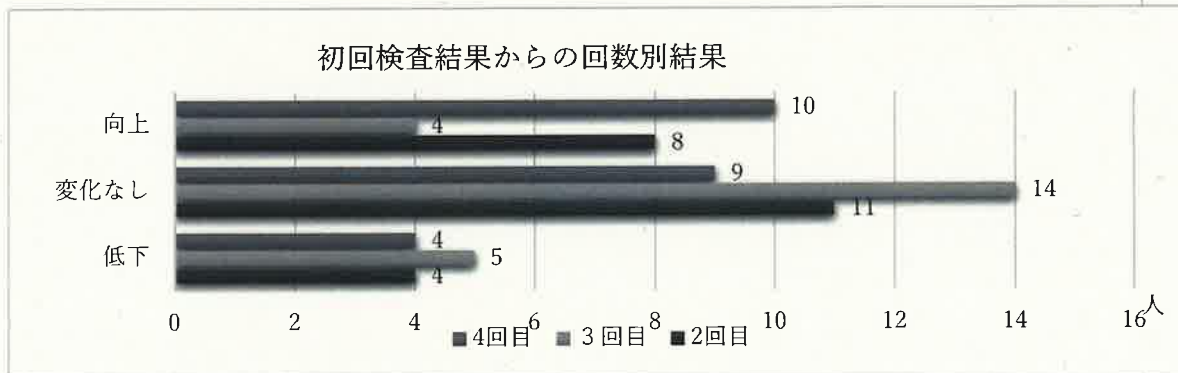
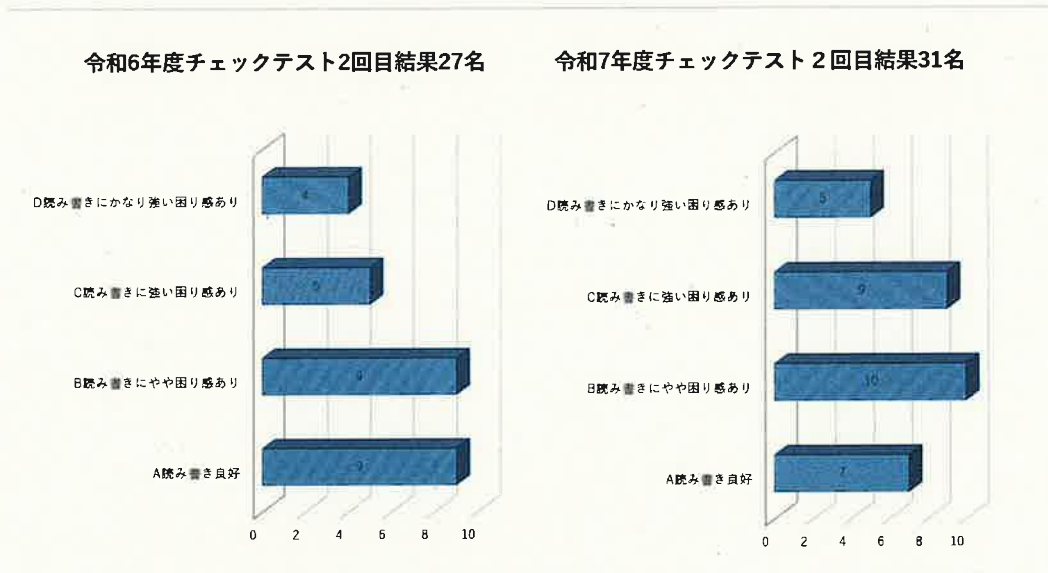
教職員に対する相談や支援

四万十町就学前プロジェクトに参加する

【成果と課題】

(成果)

- ・中学生は授業に向かう姿勢や定期テストでの点数上昇を目指す姿勢が出現している。
- ・構音不明瞭な小学生の構音が発音できる音が増加し明瞭度も向上している。
- ・保育所の未熟構音の訓練を行い就学に向けた取り組みを行った。
- ・2名が終了した。(進級に伴い5名は終了予定)
- ・訓練実施児童数が増加した。
- ・まるぐランドのチェックテスト結果を学校に提供した。



まるぐランドチェックテストを2年間(計4回)実施した23名の1回目結果を基に比較した結果。

(課題)

- ・まるぐランドの使用が中止となるため評価をどのように行うかが課題となる。
- ・実人数が40名を超え各学校複数名の実施となり調整が難しくなっている。
- ・読み書きの困難さに加え算数障害の希望も増加傾向にある
- ・保育所での未熟構音児への支援導入を検討する必要がある。

【今後の取り組み】

- ・就学前プロジェクトに協力していく。訪問の継続をする。
- ・学習障害につながる児童生徒に対応できるよう調整していく。
- ・幼保の児童への構音訓練への介入が出来るように調整していく。

5. 研究協力校の取り組み

【目的・概要】

教育研究所では、四万十町の教育振興及び児童・生徒の基礎学力の向上定着等、健全なる成長のために研究等を行う団体に対して、「研究協力校」として業務を委託している。

今年度は、以下にあげる2校を「研究協力校」として業務を委託した。

学校・団体名	研究業務	会長
窪川小学校 窪川小学校校内研究会	特別活動に関する研究	窪添 泰平 (窪川小校長)
仁井田小学校 仁井田小学校 ICT 活用推進チーム	教科に関する研究	森田 麻里 (仁井田小校長)

【実施内容】

◎窪川小学校

特別活動に関する研究

研究テーマ	学びをつなぎ、主体的に考え、話し合う学習集団の育成 ～特別活動と各教科等との往還を目指して～
研究概要	<p>【研究仮説】</p> <p>生徒指導の4つの視点を生かした取組・特別活動を柱とした学級経営を通して、同じ目標に向かう集団づくり・学びに向かう集団づくりの基盤をつくりながら、その上に授業改善を図っていくことで、学びをつなぎ、主体的に考え、話し合う学習集団が育つであろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どの授業でも、様々な活動の中でも、「自己存在感の感受を促進する」「共感的な人間関係を育成する」「自己決定の場を設定する」「安全・安心な風土を醸成する」という生徒指導の4つの視点を生かした取組を仕組んでいく。その取組の中で、子どもたちが目標（めあて）を立て、その目標（めあて）達成のために、自ら判断し実行する自己指導能力を育成していく。 ・自主的に解決していこうとする態度を身に付けるための学級活動や学校行事を仕組み、実践と振り返りを繰り返していく。その中で、互いに受け入れる気持ちを育み、みんなで取り組むことを通して達成感を味わわせ、集団として高め合ったり、よりよい人間関係を形成したりできるようにしていく。 ・見通しをもって学習や話し合いを進め、全員で共有・活動するために、可視化したり安心できる雰囲気づくりをしたりする。

<p>研究の成果○ と課題●</p>	<p>○全校研などの研修を通して学級活動（１）を研究することで、授業者の授業力向上や全校で共通認識ができ、特別活動に対する意識が向上した。</p> <p>○学級会を繰り返すことで、「何をするかを選ぶ」学級会から「工夫を考える」学級会になり、自分の意見だけでなく相手の意見も大切にする学級会になった。</p> <p>○学級会で決めたことを実践する場が多くあった。中でも、１年生から保育園児に向けたおもちゃまつりや、３年生から生姜づくりでお世話になった方へ向けたしょうがパーティー、４年生から保護者へ向けた１０才の集い、６年生がアレルギーをもつ児童のことを考えた取組など、相手を意識した実践が充実した。</p> <p>○▲児童に行ったアンケート「あなたは授業中に自分の思いや考えを安心して言えますか」という問いにおいて、８０．６％の児童が肯定的回答をしているが、２割弱の児童は否定的であった。誰もが意見を安心して言えるように、今一度生徒指導の４つの視点を意識した授業を実践する必要がある。</p> <p>▲委員会活動など学級外での話し合い活動では、自主的に課題を解決していこうという姿勢がまだ弱く、自主的な活動や実践には至らなかった。</p>
------------------------	---

◎仁井田小学校

教科に関する研究

研究テーマ	<p>「考えを紡ぎ、共に高め合う子を育む授業創造」 ～学び合いを深める授業研究。単元構想とICT活用による授業改善を通して～</p>
研究の概要	<p>【学び合いを深める授業研究】 (1) 児童の思考・判断・表現を高める授業づくりの工夫 ①単元を見通した授業設計の改善 ②ICTを効果的に活用し、学習の質を高める実践 ③教師間の学び合いを促進し、学校全体で授業力向上を目指す。</p> <p>【帯タイムや放課後学習を活用した取組】 (1) 認知機能強化トレーニングとしてのコグトレオンラインの実施 (2) 基礎学力の定着を図るためのデジタルドリルの活用</p>
研究の成果と課題	<p>〈成果〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・単元全体を見通した授業計画ができ、学習の質が向上した。 ・学習リーダーを中心に、子ども同士で授業を進める姿が見られた。 ・ロイロノートでの情報共有、体育での動画撮影など教科横断的なICT活用が進んだ。 ・総合的な学習で、児童が自らデータ検索、グラフ作成、プレゼン資料作成を行えた。 ・委員会活動でもICTを活用し、資料作成やA I 活用ができた。 ・クラウドやロイロノートを活用し、家庭学習にもつながる学びの蓄積ができた。特に県版学テで、5年生の国語・理科が県平均値+16ポイントと成果が確認できた。 ・校内研究会を通じてICT活用事例を共有し、学校全体のICTリテラシー向上につながった。 ・他校との遠隔授業参観により、複式学級でのICT活用のヒントを得られた。 ・教師間のコミュニケーションが円滑で、ICTや授業について話し合う文化が育った。 ・コグトレの導入により、児童の特性や得意・不得意を把握でき、児童自身も楽しんで取り組めた。 ・「コグトレオンライン」のダッシュボードにより、児童の課題を教職員間で共有できた。 ・ICTを活用した復習〈デジタルドリル、宿題配信〉により、学力向上が見られた。 <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・単元構想バンクやICTを生かした授業づくりに十分つなげられなかった学年もあった。

	<ul style="list-style-type: none"> ・低学年からの積み重ねが十分でないと、高学年でのデジタル化に差が生じるため単発的な活用でなく、日常化していく必要がある。 ・授業力向上のための「学び合い」〈参観・共有〉の機会が十分に確保できなかった。 ・ICT活用が得意な教員に依存しがちで、学校全体での底上げが必要である。 ・コグトレを継続的、計画的に実施できなかった学年もあった。 ・次年度は、コグトレをより効果的に活用できるよう、校内研で教員側が学びを深める必要がある。
--	---

【成果と課題】

研究協力校になった学校は、実践を重ね研究が深まるなどの成果を上げている。

本年度は研究協力校の2校で、研究員が研究のための授業を複数回させていただくことができた。3学期には単元を通しての複線型授業の実践もさせていただき、研究をさらに深めることができた。しかし、窪川小学校と仁井田小学校で訪問の数に差が生まれてしまった。また、仁井田小学校では単元を通しての授業実践をすることができず複式学級での複線型授業の実践に課題が残った。

【今後の取り組み案】

来年度も協力校と連携を深め、校内研等には積極的に参加をしていきたい。また実践の情報発信もしていきたい。

6. 副読本『わたしたちのまち 四万十町』の改訂

【実施時期】

6月 2日	第1回副読本編集委員会
8月28日	第2回副読本編集委員会
1月19日	第3回副読本編集委員会

【目的・概要】

学習指導要領改訂により教科書が変わることを受けて、四万十町の社会科副読本『わたしたちのまち 四万十町』の全面改訂を令和元・2年度において行い、令和3年度から使用している。配布から5年となる令和8度に部分改定版を発行するため、本年度は同紙の部分改定を行うこととする。

【成果と課題】

オンラインとオフラインを組み合わせることで改訂作業を行ったことにより、最低限の集合で部分改定を行うことができたことが成果である。1回目の会で改定個所の確認と役割分担の決定、2回目の会で分担作業の全体確認を行った。その後、3回目の会までに業者との原稿のやり取りが複数回あったが、その間の情報共有、編集委員への作業依頼をオンラインで行うことで集合をかけずとも作業を滞りなく進めることができた。

課題は、役割分担の比重のバランスが悪かったことである。人によってはほとんど作業の必要がないままとなってしまうため、次回の改訂の際にはそういったことがないようにしたい。

【今後について】

令和8年3月19日に完成品が納品予定である。そこから早い段階で各学校に配布をして4月から副読本を使用できる状態にする。

7. 四万十教科書センターの運営

【運営要項】

- 設置場所・・・「四万十町農村環境改善センター」の一室
- 開室・休室及び閲覧時間
 - 開室日・・・・・・月曜日～金曜日
 - 休室日・・・・・・土・日曜日、祝祭日、12月29日～1月3日
 - 閲覧時間・・・・・・午前9時～午後5時
- 貸し出し期間・・・10日間を限度とする（展示会開催期間中を除く）
- 教科書展示会・・・文部科学省の告示により決定
(今年度開催期間：令和7年6月10日～6月24日)

【目的・概要】

教育関係者の教科書研究の便宜や一般の方々への情報公開の一環として、平成24年1月4日より四万十町教育研究所で企画・運営・管理を行っている。

主な業務内容としては、教科書の貸し出しと教科書展示会の開催である。例年、年度初めの校長・教頭合同会において、研究所の業務の一環として「四万十教科書センター」の運営のことをお知らせしている。

【成果と課題】

今年度も、年度初めから各校に教科書の貸し出しについて周知を行い、展示会開催については、広報や研究所便りでも情報発信を行った。展示会の開催期間中には、教育関係者以外の閲覧もあった。

しかし、教科書の閲覧や貸し出し件数は多くないため、今後の情報発信にも工夫が必要だと思われる。

【今後の取り組み案】

現場の先生方や町民の皆さんに広く活用してもらえるように、情報の発信をしていきたい。

教科書展示会の様子



8. その他の取り組み

(1) 研修会

期 日	内 容	備 考
7月6日	司法面接技法を用いた子どもからの事実の聴き取り 司法面接研修	ふくし交流プラザ
7月8日	SOSに気づく力が命を守る力になる —学校を変えるリーダーの視点—	Zoom 研修
7月24日	高岡地区教育委員会連絡会教育支援部会研修	津野町
7月27日	自閉症講演会	Zoom 講演会
8月8日	相談支援体制の充実(チーム学校)に向けた連絡協議会	土佐市
8月29日	就学支援プロジェクト保幼小接続・連携研修	四万十町
8月30日	学習を支える見る力 大阪LDセンター奥村先生講演会	土佐市
8月30日	エキスパート養成基礎研修(自閉スペクトラム・学習障害)	高知県言語聴覚士会
9月5日	SSW 連絡協議会	いの町
9月30日	教育支援部会	四万十町
10月5日	エキスパート養成基礎研修(発達性協調運動障害)	高知県言語聴覚士会
10月11日	子どもから大人までの発達障害 ～ESSENCEの視点から～	高知市 ギルバークセンター
10月24日	第2回SSW 初任者オンライン研修	
11月17日	高岡地区教育委員会教育支援部会研修視察	高知市
12月6日	学校教育連携担当者連絡協議会	日本言語聴覚士協会
12月13日	児童虐待予防研修会	四万十町
2月8日	機能性構音障害の指導の実際	高知県療育福祉センター
2月10日	映画「どうすればよかったか？」	四万十町
2月13日	ぼくらの心に灯がともるとき ～それぞれの立場でできること～	高知市

(2) 所内会・全体会

【実施時期】

月・日	会の種別	場 所	月・日	会の種別	場 所
4/15	全体会・所内会	改善センター	11/11	全体会・所内会	改善センター
5/21	全体会・所内会	改善センター	12/10	全体会・所内会	改善センター
6/11	全体会・所内会	改善センター	1/21	全体会・所内会	改善センター
7/15	全体会・所内会	改善センター	2/19	全体会・所内会	改善センター
9/16	全体会・所内会	改善センター	3/17	全体会	改善センター
10/7	全体会・所内会	改善センター			

【目的・概要】

所内会では、教育支援センター、SSW、ST が関わっている児童生徒の報告を行い、情報の共有化を図るとともに教育支援業務に対して検討を行う。所長が少年補導センター所長も兼ねており、少年補導センターを含む全体会と所内会を月 1 回開催している。

【成果と課題】

全体会、所内会ともに定期的に行うことができた。全体会で話し合う大まかな内容は、以下の通りである。

日程	全体会の流れ
9:30～10:30…少年補導センター所内会	1. 月行事の確認
10:30～11:00…全体会	2. 所内報告
11:00～12:00…研究所所内会	3. 今後の取り組み
※兼務である所長が全ての会に参加し、大正からの参加もあるため、できるだけ時間を有効に使えるように工夫している。	4. その他

所内会には、学校教育課支援担当職員も参加しており、支援の必要な児童生徒の情報を共有することができた。また、教育支援センターは場所が離れていることから、通室してくる児童生徒の様子や支援の状況を全体で把握し、共通認識を深めることができた。7月、12月には教育長、教育次長も参加しての学期末教育支援業務報告会を行った。

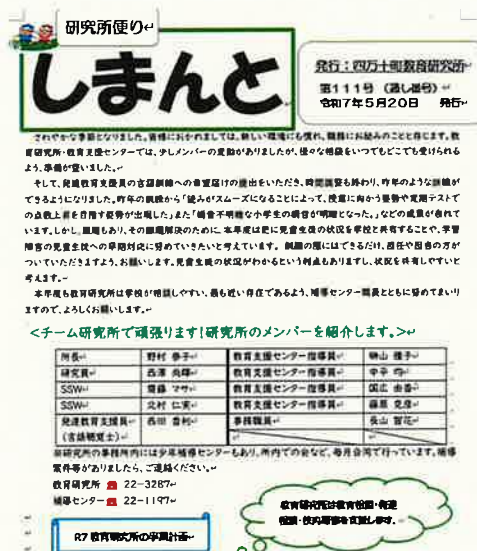
【今後の取り組み案】

今後も月 1 回の所内会を原則とし、教育研究所の業務と教育支援センターの活動についての意見交換を行い、情報の共有化を図っていくこととする。また、情報共有だけで終わることがないように、様々な関係機関とつないだり連携したりしながら、支援の必要な児童生徒へ対応していけるようにする。

(3) 教育研究所便り「しまんと」

【実施時期】

第111号	5月	発行
第112号	7月	発行
第113号	9月	発行
第114号	11月	発行
第115号	1月	発行
第116号	3月	発行



【目的・概要】

教育支援センターの活動の報告や研究所の業務内容を中心とした通信とし、町内の教職員、教育研究所運営委員、教育委員、他市町村教育研究所に配布している。

また、研究所便りを通して、研究員による研究に係る情報発信も行っている。

研究所便りはホームページにアップし、研究所の活動内容を町民の皆様へも知ってもらえるようにしている。

【成果と課題】

学校に対しては、研究所便りの中で、児童生徒の問題行動や欠席が続くなどが出た場合、研究所や支援センターに連絡してほしいことや、教育相談・発達相談にも応じていることを繰り返し伝えてきた。また、研究員の研究テーマであるデジタル学習基盤活用に関することについて、研修会に参加して学んできたことの内容や各校の実践例を情報発信することができた。

研究所便りをホームページにも掲載はしたが、研究所の業務内容や相談業務について、保護者や地域への周知はまだ十分でないと考えている。

【今後の取り組み案】

来年度も2ヶ月に1度研究所便りを発行していく。引き続き、先生方が児童生徒への対応に悩んだ時に連絡をいただけるように呼び掛けたり、各校の実践等を紹介するなど少しでも役立つ情報を発信したりすることに努めたい。

(4) えんぴつの持ち方教室

【実施時期】

月 日	学 校
4月15日(火)	am:田野々小 pm:北ノ川小
4月16日(水)	仁井田小
4月17日(木)	am:窪川小 pm:七里小
5月12日(月)	米奥小
5月14日(水)	影野小
5月20日(火)	東又小
5月22日(木)	十和小

*川口小は1年生がいないため実施していません。

【目的・概要】

四万十町内の業者と個人の方のご厚意により、「筆育もんちゃんえんぴつ」を小学1、2年生に寄贈していただいている。この鉛筆は、正しい持ち方ができるように高知市の絵本の店ココ・サンが考案したもので、指をどこに置けばよいのかを意識しやすいようにイラストがついている。また、鉛筆の正しい持ち方を早いうちから身に付けることができるように、寄贈していただいた鉛筆を使用しての「えんぴつの持ち方教室」を1年生を対象に開催している。

【成果と課題】

今年度も町内全ての学校で「えんぴつの持ち方教室」を開催した。教育研究所が日程調整やココ・サンとの連絡調整をしたり、学校に同行して鉛筆教室の支援を行ったりしたことで、学校にできるだけ負担をかけずに開催することができた。保育所での開催については、今年度から行わないこととなった。

「えんぴつの持ち方教室」を行うことにより、鉛筆の正しい持ち方について学ぶ機会となっているが、正しい持ち方を定着させるためには各学校で継続して指導していくことが必要である。

【今後の取り組み案】

来年度も、入学してから早い段階での鉛筆の持ち方教室が開催できるように調整していきたい。



令和7年度 四万十町教育研究所スタッフ

所 長	野村 泰子	
研 究 員	西澤 尚輝	
教育支援センター指導員		
	中平 均	榊山 雅子
	藤原 克彦	国広 由香
スクールソーシャルワーカー		
	齋藤 マサ	北村 仁実
発達教育支援員（言語聴覚士）		西田 香利
事務職員	長山 智花	

令和8年4月吉日